

信仰圏研究の成果と展望

— 金村別雷神社信仰を事例として —

松井圭介

- I. はじめに
- II. 信仰圏研究と地理学
 - (1) 信仰圏研究の視点
 - (2) 信仰圏研究の課題
 - (3) 信仰圏研究の方向
- III. 信仰圏研究の事例
 - 金村別雷神社の場合 -
 - (1) 研究対象および研究方法
 - (2) 第1次信仰圏における信仰の受容形態
 - (3) 第2次信仰圏における信仰の受容形態
- IV. おわりに

I. はじめに

宗教現象と地理学との関わりは古く、Kong¹⁾によれば、その淵源は古代ギリシアにまで遡及する。西洋近代における諸学問の成立と同様に、啓蒙思想が広まり、中世のキリスト教的世界観による呪縛から地理学や宗教学が解放されて以降、宗教地理学は地理学と宗教学というそれぞれ独立した学問分野の一分野として担われていくことになる。地理学では、宗教現象の地理的分布や伝播、宗教景観の顕れとその意味、あるいは宗教現象の地域構造との関わりなどが課題とされた。一方、宗教学では、人類の宗教体験の地理的な顕れ（例えば神話・伝承の地理、宗教と風土の関わり）などが研究の課題とされてきた。

このように長い研究史を有する宗教地理学

であるが、Tuan²⁾やSopher³⁾、Stump⁴⁾らによって指摘されるように、その研究対象の不確定さや方法論の欠如に対する批判がなされてきた。このことは、研究対象とする宗教現象がもつ固有の性質に帰するところが大きく、宗教現象が本来人間の宗教体験に起因するために、個人の宗教体験のような空間的に直接の顕れを持ちにくい現象は地理学の研究対象として扱い難いという事情がある⁵⁾。一方、宗教学の側からすれば、宗教現象のもつ地理的な側面は宗教体験の必ずしも本質ではなく、宗教地理学が等閑視されてきたという事情による。

わが国における宗教地理学に関する包括的な動向は、当麻⁶⁾、松井^{7) 8)}、小田⁹⁾らによって検討がなされてきた。小田は宗教地理学の主要な研究テーマとして、①宗教都市・宗教集落、②巡礼・参詣、③墓制、④宗教分布・信仰圏、⑤村落の宗教組織、⑥絵図、⑦山岳聖域、の7つに類型化し、研究が顕著に増加しているのは、②③④⑥⑦の分野であることを指摘している¹⁰⁾。松井は①宗教の分布・伝播と空間構造に関する研究、②都市・村落景観と社会集団に関する研究、③風土・自然環境に関する研究、④巡礼・観光・聖地に関する研究、の4つの視点から近年の研究動向を整理した¹¹⁾。小田の分類による④のテーマは、松井による①のテーマの核心部であるが、小田の指摘にもあるように、従来から研

究の蓄積がなされてきたテーマであり、昨今も岩鼻¹²⁾、長野¹³⁾、金子¹⁴⁾、筒井¹⁵⁾ら多くの研究者により貴重な業績が得られている。

信仰圏研究は、地理学のほか、歴史学や民俗学などの分野で個別のモノグラフが蓄積されてきた一方で、研究対象や手法、データの取り扱いなどに関する議論が必要であると考えられる。そこで本稿では、これまで筆者が取り組んできた金村別雷神社信仰を事例に、その研究方法と成果を検討することを通して、信仰圏研究の課題と今後の研究の方向性を展望することを目的とする。

次章で既往の信仰圏研究の視点と課題を整理し、続いてⅢ章で、筆者の研究を事例に信仰圏研究の成果を紹介し、最後に自身の研究を批判的に検討することを通じて、今後の展望を行う¹⁶⁾。

Ⅱ. 信仰圏研究と地理学

(1) 信仰圏研究の視点

信仰圏の定義には、研究者間により多少の相違はあるものの、基本的な共通見解が得られている。代表的な定義の例として、「山岳・社寺のような崇拜対象に対する信仰の空間的範囲」¹⁷⁾、「ある種の信仰形態が支配的な地域や空間的広がり、または特定の宗教や宗派に属する人びと、共通の崇拜対象や信仰体系を有する人びととがかなり集中的に居住する範囲」¹⁸⁾、「山岳信仰の中心一周辺関係を聖域圏・準聖域圏・信仰圏の三つの領域からなる圏構造として把握し……広域に拡がる信者(参詣者)の居住する空間が信仰圏」¹⁹⁾などが挙げられる。信仰圏を定義する際に主として山岳信仰が念頭に置かれているのは研究史の反映であるが、何らかの宗教(信仰対象)に対する信仰の空間的広がりを意味する点で一致している。

これまでの信仰圏研究では、民俗学、歴史学に地理学を加えて、主として山岳信仰を対象として、信仰圏の空間構造の研究蓄積がな

されてきた。民俗学や歴史学の立場では、末社の勧請年代や勧請形式、勧請者、各種民俗資料や檀那場の記録資料などをデータとして、地域への信仰の伝播・受容の歴史的展開過程を検証し、その中で信仰の地域差にも着目がなされてきた。一方で地理学の立場からは、これらの資料に加えて、崇拜対象側である社寺事務所所有の一次資料の利用も積極的になされ、信仰圏の現代的な様相にも関心が向けられている。なかでも空間モデルへの強い志向性がみられ、同心円的な空間構造の指摘・検証がなされ、より精緻な信仰圏の圏域区分を行い、各圏域の空間特性を検討してきた。

山岳信仰圏の空間モデルとしては、岩木山、相模大山、出羽三山、戸隠山などの事例から概ね3つの圏域に区分され、各圏域の空間特性には、崇敬対象を問わず共通点がみられることが明らかにされてきた(表1)。

山容を直接視認することが可能な山岳周辺域(第1次信仰圏)では、水を支配し作物の豊凶を占う農耕神的性格が強く表出し、あわせて祖霊の憩う地としても崇拜がなされている。また信仰組織が共同体の社会組織と結合し、お山参詣(岩木山)のように登拝が成員にとって通過儀礼的な意味をもつことも指摘されている。

山岳周辺域から離れ、山容を望見できない地域では、御師の配札活動といった信仰の伝道者が果たす役割が大きい(第2次信仰圏)。ここでは山岳との直接的な関係は薄れるものの、集落の社会組織とは独立した信仰組織(講)が営まれ、定期的・周期的な参拝が行われる。

さらに遠隔にあたる信仰の最外縁部では、信仰の密度を示す信者数は希薄となり、分布は分散的・飛び地的となる(第3次信仰圏)。ここでは聖なる代替物、例えば分霊や模擬山、納め太刀などへの信仰がみられ、山岳から遠距離にあたるこの地域では、定期的・周期的な参拝が困難となり、代替聖地へ

表1 信仰圏の圏域と特徴

		岩木山	大山	出羽三山	戸隠山	笠間稲荷
I	距離	0~20km圏	0~50km圏	0~50km圏	0~50km圏	0~50km圏
	特徴	初参り5歳以下 高頻度の参拝	農耕守護神的性格 死霊鎮座的性格	青少年層の登拝 共同体的結合	徒歩1日行程 水神	農耕神 産物献納者の分布
II	距離	20~30km圏	—	50~150km圏	50~150km圏	50~150km圏
	特徴	初参り10歳前後 中頻度の参拝	修行霊場的な性格 御師の配札活動 代参講の成立	成年層の登拝 代参講の成立	水神 作神・農耕神 代参講の成立	個人祈願者の分布 同行仲間型の講の 成立 分霊勧請者の分布
III	距離	30~75km圏	—	150~350km圏	150~350km圏	150~800km圏
	特徴	初参り15~20歳 低頻度の参拝 模擬岩木山への 参拝	勧請神的性格	老年層の登拝 同行仲間型の講 の成立	信仰の分布の希 薄性	信仰の分布の希薄 性 分霊勧請者の分布

〔資料〕

岩木山：小山隆秀「模擬山習俗からみた岩木山信仰－信仰圏の設定をめぐって－」，日本民俗学203，1995。
本文注14）金子論文。

大山：鈴木章生「相模大山信仰の成立と展開」（圭室文雄編『民衆宗教史叢書第22巻 大山信仰』，
雄山閣出版，1992）。

出羽三山：本文注19）岩鼻論文。

戸隠山：岩鼻通明「戸隠信仰の地域的展開」，山岳修験10，1992。

笠間稲荷：本文注21）拙論。

（本文注16）拙著を一部改）

の参拝や分霊勧請といった信仰システムがとられているものと考えられる²⁰⁾。

これらの圏域は、その範囲や形状、信仰内容など細部では、各崇拝対象のもつ信仰の固有性に基づく差異が存在するものの、空間モデルとしては多くの面で共通見解が得られてきたといえる。また山岳信仰以外でも、例えば笠間稲荷といった流行神的な信仰においても、同様な同心円的構造に基づく空間モデルが適用されてきた²¹⁾。しかしながら、信仰圏の空間モデルに関する研究蓄積が豊富になるにつれて、同時に信仰圏研究の課題も指摘されるようになった。

(2) 信仰圏研究の課題

信仰圏研究の課題を簡単に整理するならば、①どのような指標に基づいて圏域区分を行うのか、②圏域区分はどのように行うのか、③圏域区分にはどのような意味があるのか、という3点に集約される。

か、という3点に集約される。

第一点は圏域設定の指標についての問題である。信仰圏の全域にわたり均質なデータを収集することが極めて困難であると同時に、そこで指標とされる信仰の形態、例えば従来の研究で信仰圏を把握する上での指標とされてきた登拝参加者の年齢、分霊の勧請、講の組織、末社の分布などは、研究対象によってその発現形態も異なるため、研究対象に応じて指標が相違してしまうという問題がある。また信仰圏は対象宗教の栄枯盛衰によってその範囲や形態も変化が生じるが、同時代の資料を各地で収集し、信仰圏の時代的变化を把握することは困難である。研究対象時期が現代に近づけば、社寺務所等の資料が残存して把握することが可能になる場合もあるが、歴史的に遡及してその動態変化まで明らかにすることは容易ではない。

第二点は圏域区分の方法についての問題で

ある。同一圏域内が必ずしも等質な空間ではなく、他の圏域の特徴を併存している例もみられる（例えば出羽三山など）。中心となる山岳からの距離帯が、当該信仰の様態（例えば山の高さや山容、布教方法など）に関わってくることは予見できても、その距離自体のもつ意味はこれまでほとんど議論されてこなかった。また信仰圏の同心円構造も、研究の嚆矢といえる宮田²²⁾に示されたモデルを承認しているにすぎないという批判もなされている²³⁾。このように信仰圏研究はその普遍的な空間モデルが志向されつつも、資料の制約や宗教のもつ歴史的特殊性（固有性）もあり、解決されるべき問題が残されていることがわかる。

第三点は圏域区分された各空間の意味についてである。すなわち信仰圏はなぜ地域分化するのか、そして圏域に区分することの意義は何かという課題である。地理学における信仰圏研究は民俗学や歴史学などと競合するかたちで進捗したため、これらの学問との差異化から空間モデルが意識されたことは否めない。信仰圏に区分すること自体が目的化し、いわば「地域区分のための区分」がなされてきた感すらあった²⁴⁾。信仰圏の地域分化に関しては、信仰対象となる山岳・寺社からの距離に応じて、聖地参詣の困難さや信仰集団に参詣が果たす機能の違いが議論されてきたが、信仰圏が圏域に分化するのはなぜか、そこには合理的な説明はなされるのか、といった課題は十分に解決されていない。

このように、普遍的かつ整合性をもった圏域区分の指標や区分の方法を見いだす試みは、現状では成功したとはいえない。従来の研究では、各信仰圏の圏域における空間的性格をより精緻に記述することに力点が置かれ、結果として信仰圏を細分化し、詳細な類型に分類することが目的化される傾向にあった²⁵⁾。しかしながら資料上の制約に加えて、宗教現象が多様であることもあり、何らかの

統一的な指標を見いだし信仰圏を区分する試みは困難であるともいえる²⁶⁾。

(3) 信仰圏研究の方向

以上みてきたように、個別の宗教における信仰圏の空間的な特徴は、既往の研究により解明されつつあるが、同時に、前述した問題を常に内包しており、信仰圏研究は一種の閉塞的な状況にあるとの感もぬぐえない。そこで新たな研究の方向として、信仰圏の各圏域の空間的意味を検討することを通して、日本の宗教の様態の解明を志向する動きが登場した²⁷⁾。西洋のキリスト教的な社会やイスラム社会の宗教伝統と比較して、日本の社会は、ある地域（個人）において、複数の信仰が同時に調和的に受容された社会であるといえる²⁸⁾。複数の宗教が、ある面では競合しつつも、むしろ選択的に受容され、地域（個人）において共存してきた。このような日本の宗教的な様態に鑑みると、複数宗教間の重層的な分布構造を明らかにすることが重要なテーマとなりうる。

こういった志向性は多くの研究者に指摘されてきた。例えば岩鼻²⁹⁾は、信仰圏内村落の現地調査を行うことにより、個々の村落を中心とする信仰圏の中に当該宗教（ここでは出羽三山）を位置づけていくことの必要性を指摘し、その延長として、山岳宗教相互間の階層的な分布構造の解明があるとする。同様に金子³⁰⁾も、信仰の重層性ともいふべき現象は、これまでの信仰圏研究ではあまり分析の対象とされておらず、今後の研究の一つの方向性を考えるうえで、きわめて重要な点を含むと主張する。

図1は日本の地域社会における宗教受容の重層性を模式的に示したものである。日本では、ある地域がある特定宗教の信仰圏のみに属している場合は異例である。ある地域はA宗教の第1次信仰圏であると同時に、B宗教の第2次信仰圏であり、C宗教の第3次信仰

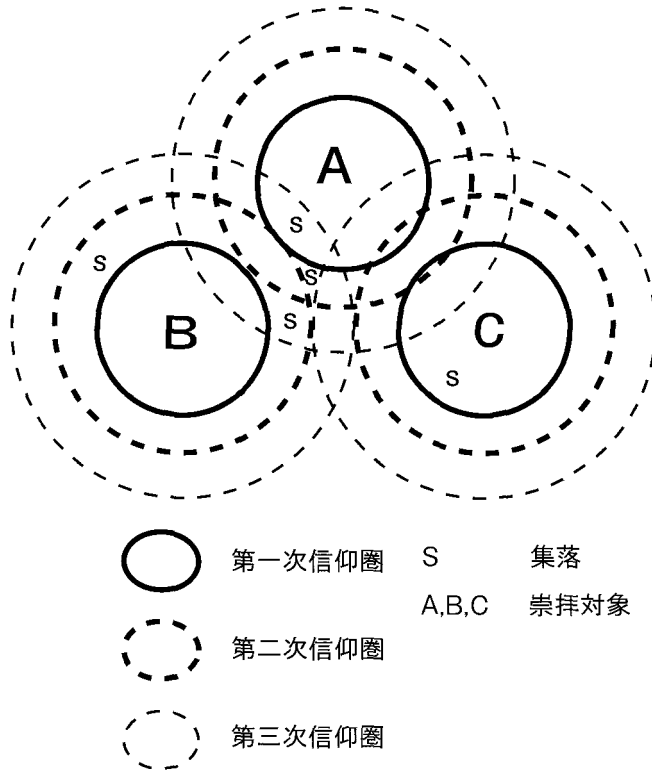


図1 日本の地域社会における宗教受容の重層性のモデル

圏に属しているという場合も多いことが予期される。信仰圏研究の意義は、宗教的な空間構造の解明であり、それは同時に日本社会における宗教の特質を解明する手がかりになる。

次章では、地域社会において、複数の宗教に対する信仰が重層的に受容されている状況を具体的な事例から検討し、図1に示したモデルを現実にあてはめて解釈する。

Ⅲ. 信仰圏研究の事例

一 金村別雷神社の場合一

(1) 研究対象および研究方法

研究対象とする金村別雷神社は、つくば市の西端を南流する小貝川の氾濫原に立地する神社で、旧郷社格をもつ。縁起によれば、931(承平元)年、領主・豊田将基によって、賀茂別雷神社の分霊を勧請して創建されたと

伝えられる。金村別雷神社は、信仰者から金村様や雷様と呼ばれ、創建以来、五穀豊穡祈願や雹雷除けをはじめ、家内安全、無病息災の神としても信仰されている³¹⁾。五穀豊穡を祈願する農業神として崇敬を集めており、その信仰圏は氏子地域を越えて、関東地方に広がっている。

信仰圏の把握およびその空間特性に関する分析は、以下の手順で行った。第一に、信仰圏の範囲を画定するために、金村別雷神社社務所蔵の資料および神社境内に建立された講碑文や奉納額などを用い、講および個人崇敬者の分布を把握した。講に関しては、各種講³²⁾における講員の分布を1949(昭和24)年、1985(昭和60)年、1995(平成7)年の各年次において把握した。1995年において定期的に参拝がみられた講の分布は茨城、埼

玉、千葉、東京の1都3県に及び、総数は254であった。個人崇敬者は、昇殿し祈禱を受けた崇敬者（昇殿祈願者）の分布を示した（図2）。資料の制約上、1995年度の状況に限定されるが、1年間に延べ1,031人が昇殿祈願を行っており³³⁾、その分布は1都7県（茨城、千葉、埼玉、東京、栃木、神奈川、愛知、長野）に広がっている。分布状況の把握と並行して、信仰形態を把握するためのサンプル調査を聞きとりで行った。聞きとりは講の世話人ないし代参者に対して直接実施した。期間は1996（平成8）年～1998（平成10）年の3年間であり、92講から有効データが得られた。聞きとり内容は、各講の起源、祈願内容、宗教儀礼、供物、授与品、講の運営法、産土神との関係、集落内における他の宗教に対する講の有無などである。こうして得られ

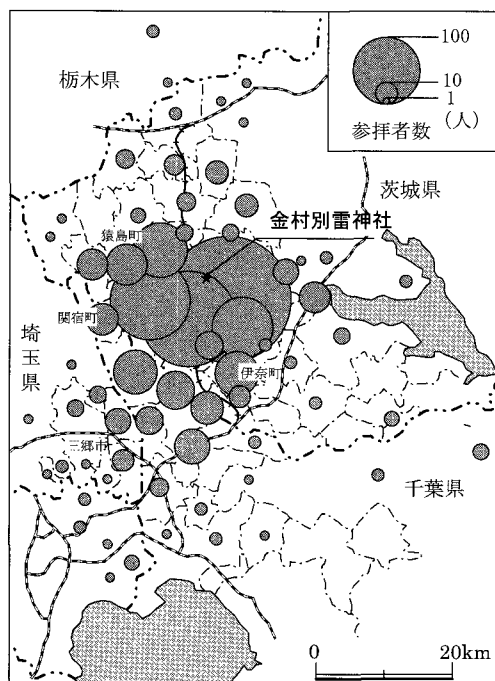
たサンプルデータを基に、後述する研究対象地域を選定した。

第二に、講と個人崇敬者の分布を基に、信仰圏を2つの圏域に区分し、神社を中心とする近隣地域を第1次信仰圏、外縁地域を第2次信仰圏とした（図3）³⁴⁾。

第1次信仰圏は、金村別雷神社を中心とする、北西方向から南東方向にかけての長径50km、短径20kmの楕円形にあたる地域を指定した。茨城県西部から南部にかけての市町村が該当する。この第1次信仰圏は、団体講と日月年参講の分布の集積する地域であり、個人崇敬者の80%以上が居住する。第2次信仰圏は、第1次信仰圏の主として南側の外縁部に位置する。茨城県西部から埼玉県南東部および千葉県の北部の市町村を含んでいる。この第2次信仰圏は、太々講と祈年講の分布の集積地域である。個人崇敬者は少数であり、わずかな個人崇敬者も実態は、講による代参者が同時に個人的な祈願を行う場合がほとんどであり、代参講による参拝が信仰の中心の地域である。

講に対するサンプル調査で得られた資料から、2つの圏域では、既往の研究で明らかにされてきた各信仰圏の空間的特性を共有していることが予察された。第1次信仰圏では、青少年層の登拝および共同体的結合がみられること（出羽三山）や水神的性格（戸隠山）、農耕に恵みを与える生産神としての性格（笠間稲荷）などが指摘されているが、こうした性格が金村別雷神社にも看取された。第2次信仰圏の空間的特性としては代参講の成立が指摘されており³⁵⁾、金村別雷神社の信仰圏は既往の研究成果とも合致する。

続いて、第1次、第2次の両信仰圏より事例地区を選択し、各圏域における金村信仰の受容形態の差異を分析した。サンプル調査に基づき、第1次信仰圏からは茨城県つくば市豊里地区、第2次信仰圏からは埼玉県吉川市を事例地域として選択した。つくば市豊里地



・この他に神奈川、愛知、長野の各県に1人ずつ個人崇敬者が分布する。

図2 金村別雷神社・個人祈願者の分布(1995年度)
(金村別雷神社社務所資料による。本文注16)拙著を一部改)

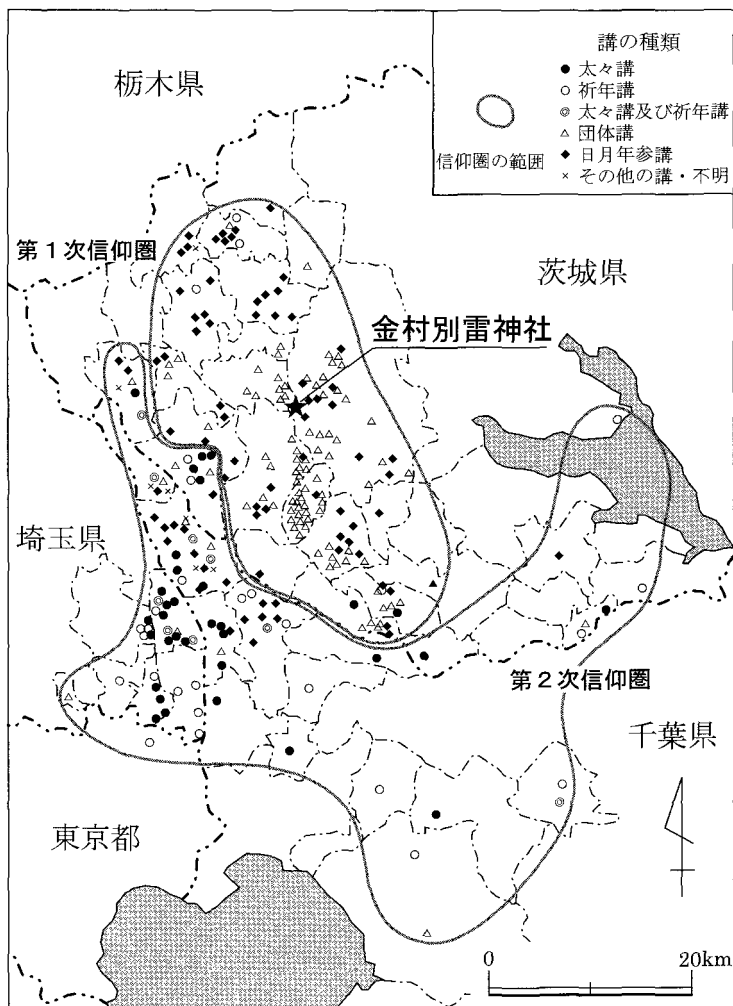


図3 金村別雷神社信仰圏の地域区分
(本文注16)拙著を一部改)

区は、金村別雷神社が勧請された地区であり、個人崇敬者が多く、団体講と日月年参講のみが組織される第1次信仰圏内の代表的な地域である。吉川市域は、代参講である太々講や祈年講の分布の核心部であり、第2次信仰圏を代表する地域であるといえる。

(2) 第1次信仰圏における信仰の受容形態
つくば市豊里地区はつくば市西端に位置する(図4)。当地区には、団体講6、日月年参講6の計12の講が組織されているが、表2

はその組織内容と信仰形態を整理したものである。豊里地区の金村講は、大字もしくは区(集落)ごとに組織された地縁集団であり、原則として全戸が加入している。戦前期の豊里地区では、共同祈願としての祈雨祈祷や豊作祈願を金村別雷神社に行う集落が多かったものの、1995年には、この共同祈願に淵源を有する日月年参講と、1940年代以降の比較的新しい時代に神社側の勧奨を受けて成立した団体講が組織されていた。各集落での金村講の組織は、集落の宗教組織や行政・自治組織

表2 つくば市豊里地区における金村講の組織と形態 (1995年)

講種	講番号	地区名	結成年代	範囲	戸数	世話人			信仰形態				
						人数	属性	任期	参拝形態	代参人数	代参者	講の儀礼	授与札
団体講	1	高野	1940年代	大字	62	3	なし	1年	秋代参	3	世話人	なし	神札
	2	遠東	1940年代	大字	50	1	なし	世襲	秋代参	1	世話人	なし	神札
	3	中東	不明	大字	43	3	氏子総代	1年	秋代参	3	世話人	なし	神札
	4	上里	1991年	大字	106	6	氏子総代	6年	秋代参	6	世話人	なし	神札
	5	今鹿島皆畑	1940年代	集落(区)	85	1	氏子総代	2年	秋代参	1	世話人	なし	神札
	6	今鹿島椿本	1940年代	集落(区)	39	1	区長	2年	秋代参	1	世話人	なし	神札
年参講	7	今鹿島上宿	1940年代	集落(区)	48	2	氏子総代	1年	正月代参	2	世話人	なし	辻札
	8	角内	不明	集落(区)	39	1	氏子総代	1年	正月代参	1	世話人	なし	辻札
	9	木俣	不明	大字	38	3	なし	世襲	正月・秋代参	1~2	世話人	なし	神札・辻札
	10	横町	不明	集落(区)	46	1	区長	2年	正月代参	1	世話人	なし	辻札
	11	大山	不明	集落(区)	40	7	区長ほか	1~2年	正月代参	7	世話人	なし	神札

本表の他にも上郷中央青年会による年参講がある。

(現地調査による。本文注16)拙著を一部改

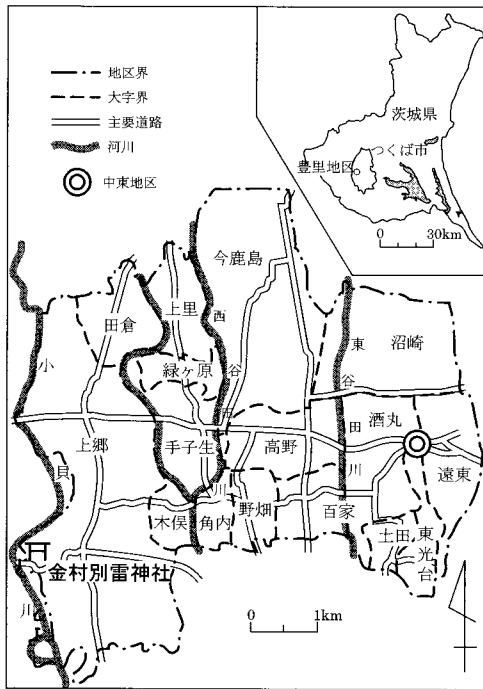


図4 つくば市豊里地区の概観 (1996年)

と結合しており、世話人も氏子組織や自治会の責任者が兼務している。したがって金村講は自立的な独立した宗教組織を形成しておらず、講が独自の組織として機能していないと考えられる。このことは講で儀礼が営まれていないことからわかる。

講が組織されている11集落から2集落を事

例とし、現地調査を行った。主要な調査項目は集落内の宗教施設、宗教組織、各宗教組織が営んでいる年間の宗教行事、住民の参拝行動、の4点である。ここでは中東地区の事例を簡単に紹介する。

中東地区は豊里地区の北東部に位置し、東谷田川左岸の台地上の集落である(図4)。調査時(1995年)での戸数は43戸、人口は176人であった。

中東地区で組織されている宗教組織は、産土社(神明神社)の氏子組織および、金村別雷神社、大杉神社(茨城県桜川村)、愛宕神社(茨城県岩間町)に対する講組織の計4組織である。産土社の氏子組織は41戸が加入しており、非加入の2世帯は女性独居世帯である³⁶⁾。産土社の氏子総代は当番と呼ばれ、1年交代の輪番制である。当番は、産土社だけではなく、集落内で行われる主要な宗教行事を担当する。前々年、前年の当番と翌年、翌々年の当番4戸が補佐役を勤める。当番の大きな任務は、11月の金村別雷神社への代参および12月に行われる本祭り(産土祭り)の執行である。

金村講、大杉講、愛宕講は集落の全43戸が加入している。産土社とは異なり、これらの神社に対する信仰には女性禁忌はない。金村講の場合、世話人は産土社の氏子総代が兼務している。大杉講と愛宕講は毎年1月に各神

社に代参する講であるが、両講の代参者は輪番制であり、2戸で代参する。両講の代参者は同一年に重複しないよう調整されている。講員は金村講と同一だが、両講とも2名の独自の世話人を有している。

このように、中東地区の集落単位で営まれている宗教組織は、産土社の氏子組織のほか、3つの講組織がある。産土社の氏子組織とほかの3つの講組織との間では加入世帯の条件が異なる。世話人は氏子組織と金村講の場合、産土社の氏子総代(当番)が務めるのに対して、大杉講と愛宕講の場合は独自の世話人を有している点で相違している。

表3に中東地区における年間の宗教行事を示した。3つの講に関してみると、金村別雷神社関係では、元朝参りと秋大祭の代参がある。元朝参りは毎年1月3日の午前中に行われる。これは集落の全戸から各1名で金村別雷神社に総参をするものである。参拝後は集落センターで新年会(初常会)が開かれる。この席で大杉講、愛宕講の代参者の確認が行われる。初常会は、行政・自治組織の会合であると同時に親睦・社交を兼ねた新年会であり、また大杉、愛宕両講の結び講³⁷⁾としての機能を有している。

大杉講、愛宕講はそれぞれ疫病除け、火災除けを祈願する信仰である。両講ともに2戸が代参する。両講とも金村講と同様に全戸が参加する。代参者は帰参後、神札を講員各戸に配付するほか、辻札を地区内6箇所立てる(図5)。辻札は、疫病および火災を含む

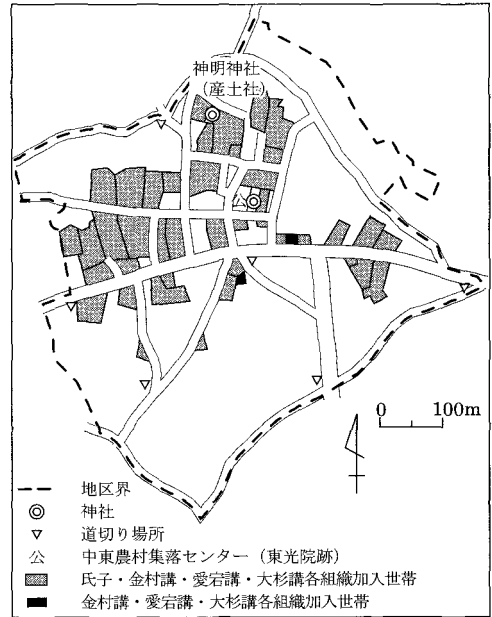


図5 つくば市中東地区における宗教組織(1995年)
(現地調査による。本文注16)拙著を一部改)

表3 つくば市中東地区における年間宗教行事(1995年)

時期	行事名	担当者	場所	内容
1月3日	元朝参り		金村社	郷中安全祈願
1月初旬	道切り(大杉講) 道切り(愛宕講)	大杉講代参人(2人) 愛宕講代参人(2人)	大杉社 愛宕社	辻札の授与 辻札の授与
8月17日	夏祭り		観音堂	
10月半ば 11月5日~11月10日 11月15日頃 11月23日 11月24日~25日	金村別雷神社 秋大祭	当番 当番 当番 当番, 世話人 当番	当番 各戸 金村社 金村社 各戸	神社からの案内 集金及び講員確認 講金奉納 昇殿祈願 神札の配付
12月第二日曜日	本祭り	当番, 金村社宮司	神明社 公民館	産土神へ報恩感謝 直会
12月下旬		当番	各戸	神宮大麻配付 紙繰りの配付 産土社小札配付

(現地調査による。本文注16)拙著を一部改)

集落全体の諸難防除を祈願するものである。

金村別雷神社へは11月23日の秋大祭時に代参する。産土社の氏子総代が講員各戸から講金を徴収する。11月23日の午前中に当番ほか役員2名が金村別雷神社に代参し、帰参後に当番が各戸へ神札を配付する。金村講として代参の前後に講員が集まることはなく、終了後の講行事も催されない。

このように大杉講と愛宕講が社寺参詣講として独自の世話人と講儀礼(結び講)を有しているのに対し、金村講は産土社の氏子組織と世話人が共通であり、また直会など講儀礼は存在しない。他方で、産土社の祭礼を金村宮司が斎行したり、集落全体で金村別雷神社に元朝参りを行っている。これらのことから、金村信仰が、大杉、愛宕両社や産土社とは別の次元で受容されていることがわかる。

次に中東地区における住民の参拜行動の事例として、1996年に当番を務めているN家における世帯主の参拜行動をとりあげる(図6)。N家は地区内の各宗教組織に参加している。新年の参拜行動をみると、最初の参拜を氏神(屋敷神)に対して行い、その後、元旦に神明神社(産土社)と安楽寺(檀家寺)に初詣をする。この参拜順序は毎年固定である。元日の午後には家内安全の祈願に一言主神社に参拜する。当社は御利益で知られる近隣の崇敬勧請社である。一言主神社には以前は1月、9月と年に2回参拜していたが、現在では1月のみである。1月3日に金村別雷神社に参拜する。これは集落の総参で行うものである。代参を除くと、金村別雷神社に参拜するのは年に1度である。

N家の参拜行動を頻度という点からみると、氏神に対しては毎日祭祀が行われており、最も高く、次いで神明神社に、月2回(1日、15日)の頻度で定期的に参拜している。年に1度の頻度で定期的に参拜する寺社としては、安楽寺、一言主神社、金村別雷神社がある。この他不定期で元三大師に参拜す

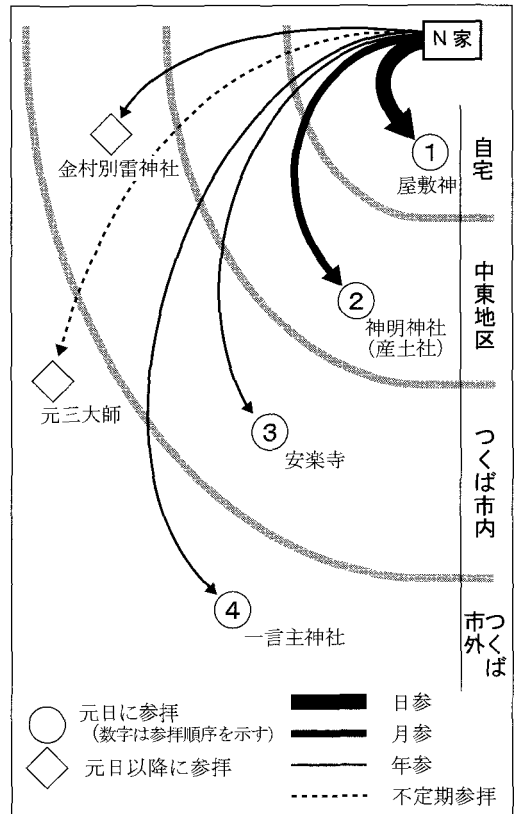


図6 つくば市中東地区N家における参拜行動(1996年)
(聞き取りによる。本文注16)拙著を一部改)

ることがあり、頻度は2~3年に1度である。一方で大杉神社や愛宕神社に個人で参拜することはない。参拜頻度は必ずしも信仰の深さの指標とはならないものの、熱心さを示す一つの目安ではあり、年間の参拜頻度と新年の参拜順序から氏神、産土社と金村社、大杉社・愛宕社との間には信仰心の差異が認められた。

(3) 第2次信仰圏における信仰の受容形態

吉川市は埼玉県南東部に位置し、都心からは20km圏にあるものの、東京と直結する鉄道がなく、農村地帯としての性格を強く残す地域である(図7)。金村別雷神社からは南西約30kmの位置にあり、近隣の埼玉県三郷

り、過半を占めている。このことは金村講が独自の宗教組織として機能を有していることを示している。

吉川市で講が組織されている12集落のなかで下内川地区を事例とし、豊里地区と同一項目に関する現地調査を行った。

下内川地区は吉川市の北東部に位置し、江戸川右岸の標高3mほどの低地に集落が立地している。地区内は5つの組（東、大熊、西、下、大柳）に分かれており、行政・自治組織や宗教組織の単位になっている。1995年における地区の世帯数は132世帯、人口は605人である。

下内川地区では1997年現在、産土社（大岩神社）の氏子組織と7つの社寺参詣講組織が営まれている。社寺参詣講は、山岳宗教に機縁を有する戸隠講（戸隠神社）、御嶽講（御嶽神社）、榛名講（榛名神社）、古峰講（古峰神社）、雷神に対する信仰組織である金村講（金村別雷神社）、板倉講（板倉雷電神社）、そして交通安全や厄除けで著名な成田講（成田山新勝寺）の計7つである³⁹。

大岩神社の氏子組織には特別な加入資格はなく、希望世帯は加入できる。93戸が加入しており、非加入世帯の大半は非農業従事者の新住民である。下内川地区の氏子総代は東組のA氏が務めている。任期や交代の制度はない。A氏の家系では先代から下内川の区長を務めており、区長を辞めた後、1960年代から氏子総代を歴任している。氏子総代の下、各組から世話人が2戸ずつ選出される。世話人は原則として2年交代の輪番制である。世話人の任務は年に3回行われる大岩神社の祭事の世話役である。

成田講を除く社寺参詣講組織はいずれも、各社寺が有する御利益に対する集落の共同祈願を基盤に結成された宗教組織であり、他地区に立地する社寺への参拝（代参、総参）が講活動の中心である。表5は産土社および社寺参詣講における年間の宗教行事を整理した

ものである。各社に対する参拝形態や代参人数、御利益は異なるが、独立した世話人（講元）と講員を有している点で共通している。

社寺参詣講の場合、世襲制の講元、世話人を有する講が大半を占め、講運営に継続性が図られている。同時に、代参者の決定・確認や講金の徴収の場としての結び講や直会といった講としての儀礼が、宗教行事として営まれている。このように産土社の氏子組織と社寺参詣講組織は、それぞれ別個の構成員を有し、かつ独自の講としての行事が営まれていることがわかる。これらのことは、宗教組織としての社寺参詣講が、行政・自治組織や氏子組織から自立した独自の組織であることを示している。また各講は、他組織に対して独自性を有していると同時に、社寺参詣講相互間は排他的ではなく、親和性も指摘される。榛名講と御嶽講は、それぞれ個別の講員を有する独自の講組織であるが、講の運営者（講元・世話人）、講儀礼（結び講）の機会は同一である。板倉講と成田講の間にも同様の共存関係があるほか、各講間での代参者の調整が図られている。また下内川地区では、月末に開かれる自治会の会合（常会）が講儀礼としての機能を有している。例えば4月の常会では、古峰、榛名、御嶽、金村の各講の講札が世話人を通して各講員に配付される。代参に関する会計報告も同時に行われる。また代参者が一巡し新講を募集する際にも常会の場が利用される。常会は本来、行政・自治組織の会合であるが、社寺参詣講の儀礼的役割も果たしている。産土社を通して配付される神宮大麻や産土社札が各戸に個別に配付されることと比較すると、社寺参詣講が相互に関連を有すると同時に、産土社の氏子組織とは一線を画した組織であることがわかる。

下内川地区の住民における参拝行動として、参拝頻度、初詣における参拝順位を図8に示した。事例とした4世帯はいずれも産土社の氏子組織に加入しているほか、社寺参詣

表5 吉川市下内川地区における年間宗教行事(1995年)

時 期	行事名	参加者	場 所	内 容
1月2日		氏子総代、世話人	氏子各戸	札の配付
1月下旬	戸隠講	講員41人、講元(1人・世襲)、世話人(1人・世襲)	公民館	札の配付
2月11日	オビシヤ	氏子 神主、氏子総代、世話人 氏子 氏子	宿 大岩神社 大岩神社 宿	弓矢、的の製作 祝詞奏上 オビシヤ 直会
3月15日	春祈禱	神主、氏子総代、世話人、区長	大岩神社	祝詞奏上、直会
3月中旬	成田講	講員(22人)(講元はなし、世話人1人)	公民館	結び講(講金の徴収と代参者の決定)
	板倉講	講員(7人)(講元はなし、世話人1人)	公民館	結び講(講金の徴収)
	成田講	代参2人	成田山新勝寺	札の授与
3月下旬	成田講	講員	公民館	札の配付
	板倉講	講員	公民館	札の配付
4月上旬	古峰講	講員39人、講元(1人・世襲)、世話人(5人・世襲)	講元宅	結び講(講金の徴収と代参者の決定)
	榛名講	講員38人、講元(1人・世襲)、世話人(5人・世襲)	講元宅	結び講(講金の徴収と代参者の決定)
	御嶽講	講員26人、講元(1人・世襲)、世話人(5人・世襲)	講元宅	結び講(講金の徴収と代参者の決定)
4月中旬	古峰講	代参8人	古峰神社	ご祈禱、札の授与、直会
	榛名講	代参8人	榛名神社	ご祈禱、札の授与、直会
	御嶽講	代参5人	御嶽神社	ご祈禱、札の授与、直会
	金村講	代参5人	金村別雷神社	ご祈禱、札の授与、直会
4月下旬	古峰講	世話人	公民館	札の配付
	榛名講	世話人	公民館	札の配付
	御嶽講	世話人	公民館	札の配付
	金村講	世話人	公民館	札の配付
5月上旬	戸隠講	講員希望者	戸隠神社	総参
8月9、10日	観音講	講員	観音堂	
9月下旬	榛名講	講元、世話人	公民館	札の配付
	御嶽講	講元、世話人	公民館	札の配付
11月23日	金村講	代参5人	金村別雷神社	ご祈禱、札の授与、直会
11月下旬	金村講	世話人	公民館	札の配付
12月15日	献穀祭	神主、氏子総代、世話人、区長	大岩神社	祝詞奏上、直会
12月下旬		氏子総代、世話人	氏子各戸	神宮大麻、幣束の配付

(現地調査による。本文注16)拙著を一部改)

講の講元・世話人を務めている。

年に2回以上の頻度で参拝しているのは、産土社である大岩神社1社であり、全戸が該当する。年に1回の頻度で参拝する社寺には、成田山新勝寺(3世帯)と川崎大師(1世帯)である。定期的に参拝がみられる社寺はこの3つであり、その他は不定期参拝となる。初詣の参拝順序は各世帯とも大岩神社が最初(元日)であり、成田山新勝寺や川崎大師は1月中に参拝されている。金村別雷神社に関してみると、下内川地区では個人が金村別雷神社に代参以外で参拝することはなく、金村別雷神社と地区住民との結びつきは、講

による参拝が唯一である。これは、成田講を除くすべての講の社寺に該当する。金村講における雷除け、御嶽講の盗賊除け、古峰講の火難除け等に代表される御利益は、集落の共同祈願の対象である。したがってこれらの神社は、個人的な崇敬対象ではなく、講組織による共同祈願として信仰が受容されているものと考えられる。下内川地区の住民にとって金村別雷神社は、家内安全や交通安全といった個人的な信仰動機で参拝する神社ではなく、集落単位での共同祈願の対象として信仰が受容されているものと解釈される。

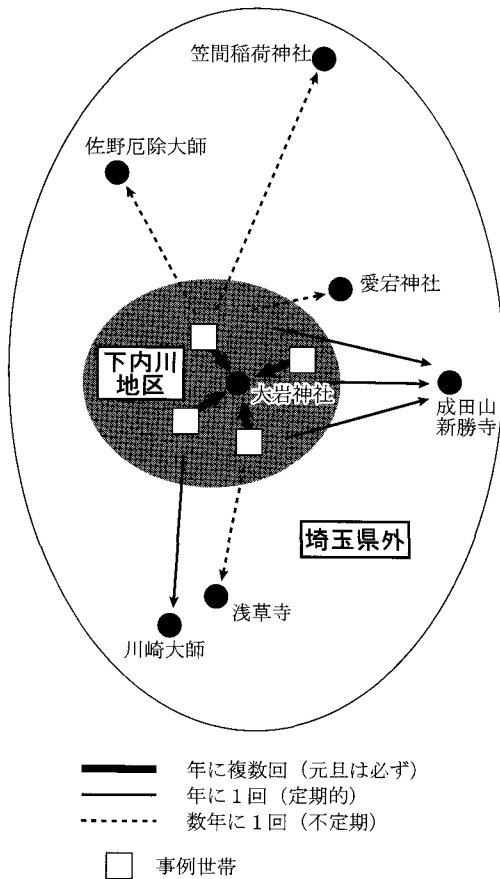


図8 吉川市下内川地区における住民の参拝行動 (1997年)
(聞き取りによる。本文注16) 拙著を一部改)

IV. おわりに

前章では、2つの信仰圏から各事例地区を選択し、主として講の組織形態（講員、世話人の属性）と信仰形態（参拝頻度・代参方式・講儀礼・祈願内容）について検討し、これを他の宗教に対する信仰（産土社の氏子組織・社寺参詣講組織・住民の参拝行動）と比較した⁴⁰⁾。その結果を、各圏域の性格として簡単にまとめると以下の通りである。

第1次信仰圏における金村別雷神社信仰の特性として、他の宗教組織（産土社の氏子組織）や行政・自治組織と金村講組織が結合し、自立的な宗教組織として機能していない点が指摘される。このことは、世話人の非継

続性と従属性や代参制度の未確立、講行事の欠如性から明白である。

第2次信仰圏における金村別雷神社信仰の特性として、産土社の氏子組織や他の社寺参詣組織から自立した独自の宗教組織を形成している点を指摘することができる。このことは、世話人の継続性と自立性、構成員の独立と代参制度の確立、また講行事の存在といった点から明らかにされる。

このような金村別雷神社信仰圏の各圏域にみられる特徴を、地域社会における複数宗教の重層的な受容構造という視点から模式的に示したのが図9である。

京都・賀茂別雷神社の分霊社として10世紀に勧請された金村別雷神社は、その近隣地域である第1次信仰圏内の各集落において産土神を越える地域守護神的な神（ここでは鎮守神と呼称する）として受容された。この範囲では、降雨祈願の御利益と共に、農耕儀礼や新年の祝祭行事としても信仰が受容され、個人単位での崇敬者を集めている。

信仰圏の外縁部に位置する第2次信仰圏の

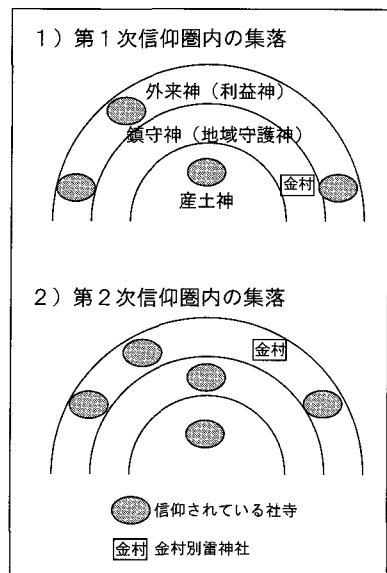


図9 金村信仰の受容形態に関する模式図
(本文注16) 拙著を一部改)

集落では、雷神としての御利益を直接の契機とする結びつきが顕著である。代参講が組織され、特定の御利益を目的とする外来の利益神（外来神）として信仰が受容されたものと考えられる。個人としての参拝の対象ではなく、集落単位での共同祈願が主として行われる。同時に、団体による参拝自体が目的化され、参拝にレクリエーションの性格が付加されている点も特徴として指摘できよう。

金村別雷神社の事例を、図1に示した地域社会における宗教受容の重層性のモデル図に即して解釈するならば、第1次信仰圏に位置する中東集落では、金村別雷神社は産土社より広域の地域守護神的な性格をもつ神社として信仰される一方で、大杉神社や愛宕神社のような特定の御利益を目的とする外来神としての信仰対象とはされていない。第2次信仰圏内の下内川地区では、他の社寺参詣講と同様に雷神としての御利益を通して、外来の利益神として信仰が受容されている。本稿では議論できなかったが、下内川地区を含む吉川市域では芳川神社（吉川市平沼）が地域守護神的な性格をもつ対象として信仰されている。

この成果は、外来信仰が地域社会に受容される過程を産土神との関わりから詳細に分析した桜井⁴¹⁾の研究とも矛盾しないが、桜井が歴史的な講の沈着過程に着目したのに対して、本稿では「産土神－鎮守神（地域守護神）－外来神（利益神）」の3層の構造を提示し、それが信仰対象の特性と集落との空間的な関係から相対的に定まるところに力点がある。

さらに金村別雷神社の事例を一般化することが可能ならば、崇敬祈願社における信仰圏の特性として、次の点が示唆される。崇敬祈願社は本来、その御利益を目的に勧請された神社である。この崇敬祈願社が勧請された地域には、既存の産土社に対する信仰が基盤に存在している。崇敬祈願社に対する信仰は、この産土社信仰を包摂する形で、第1次信仰

圏（近隣地域）における広域の鎮守神として受容される。これに対し第2次信仰圏（外縁地域）では、御利益に依拠する外来の利益神として受容される。信仰形態としては講が組織され、集団による参拝が核となるものと考えられよう。

もとより本研究の成果が信仰圏研究の到達点ではなく、またⅡ章に示した信仰圏研究の課題そのものを内包しており、結論にも予察的な仮定を含んでいる。さらに実証的なデータを蓄積する必要があるが、もって今後の課題としたい⁴²⁾。

（筑波大学大学院生命環境科学研究科）

〔付記〕

本研究には2004年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B2）（研究代表者：田林 明、課題番号16300291）および同（基盤研究C2）（研究代表者：山中 弘、課題番号15520057）の一部を利用した。本稿は『日本の宗教空間』（古今書院、2003年）の第1部および第3部の一部を改稿したものである。

〔注〕

- 1) Kong, L., "Geography and religion: trends and prospects," *Progress in Human Geography*, 14, 1990, pp.355-371.
- 2) Tuan, Yi-Fu., "Humanistic geography," *Annals of the Association of American Geographers*, 66, 1976, pp.266-276.
- 3) Sopher, D., "Geography and religions," *Progress in Human Geography*, 5, 1981, pp.510-524.
- 4) Stump, R., "The Geography of Religion, Introduction," *Journal of Cultural Geography*, 7, 1986, pp.1-3.
- 5) Sopher, D., *Geography of Religions*, Prentice-Hall, 1967, 118p.
- 6) 当麻成志「日本宗教地理学の提唱」, 人文地理13, 1961, 347~360頁。
- 7) 松井圭介「日本における宗教地理学の展開」, 人文地理45, 1993, 515~533頁。

- 8) 松井圭介「宗教地理学の動向と課題」(高橋伸夫編『21世紀の人文地理学展望』, 古今書院, 2003), 447~459頁。
- 9) 小田匡保「戦後日本の宗教地理学-宗教地理学文献目録の分析を通じて-」, 駒澤地理38, 2002, 21~51頁。
- 10) 前掲9) 33頁。
- 11) 前掲8) 449~454頁。
- 12) 岩鼻通明『出羽三山信仰の圏構造』, 岩田書院, 2003, 250頁。
- 13) 長野 覺『英彦山修験道の歴史地理学的研究』, 名著出版, 1987, 512頁。
- 14) 金子直樹「岩木山信仰の空間構造-その信仰圏を中心にして-」, 人文地理49, 1997, 311~330頁。
- 15) 筒井 裕「山岳信仰の神社における講組織の形成-国幣中社大物忌神社を事例に-」, 歴史地理学46-1, 2004, 32~49頁。
- 16) 本稿Ⅲ章における研究の成果は、著者の既往の研究に基づき、その一部を加筆・修正したものである。詳しくは松井圭介『日本の宗教空間』, 古今書院, 2003, 292頁, を参照のこと。
- 17) 小田匡保「信仰圏」(浮田典良編『最新地理学用語辞典 改訂版』, 大明堂, 2003), 140頁。
- 18) 椿真智子「信仰圏」(山本正三・奥野隆史・石井英也・手塚 章編『人文地理学辞典』, 二宮書店, 1997), 228~229頁。
- 19) 前掲12) 5頁。ただし初出は、岩鼻通明「出羽三山信仰圏の地理学的考察」, 史林66, 1983, 681~726頁。
- 20) 前掲16) 114~116頁。
- 21) 松井圭介「信仰者の分布パターンからみた笠間稲荷信仰圏の地域区分」, 地理学評論68A, 1995, 345~366頁。
- 22) 宮田 登「山岳信仰と講集団」, 日本民俗学会会報21, 1961, 5~14頁。宮田 登「岩木山信仰-その信仰圏をめぐって-」(和歌森太郎編『津軽の民俗』, 吉川弘文館, 1970), 277~295頁。
- 23) 金子直樹「日本における信仰圏研究の動向-山岳宗教を中心にして-」, 人文論究45, 1995, 105~107頁。
- 24) 前掲23) 113頁。
- 25) 前掲14) では、亜類型を含めると8つに地域区分がなされている。
- 26) 前掲21) で筆者は、笠間稲荷神社の信仰圏を昇殿祈願者、産物献納者、分霊勧請者を指標に把握し、市区町村別の信仰者の割合などから信仰の受容を検討したが、他信仰に同様の指標が当てはまるとは限らない。
- 27) 前掲16) 116頁。初出は、松井圭介「金村別雷神社信仰の地域的特性」, 人文地理学研究23, 1999, 39~58頁。
- 28) 前掲18) で椿は、「地域社会においては、神社祭祀や氏子組織、同族や家を守る氏神信仰、祖霊信仰、檀那寺と檀家組織をはじめとするさまざまな信仰形態と信仰組織がみられる」という。
- 29) 前掲19) 726頁。
- 30) 前掲23) 114~115頁。
- 31) 豊里町史編纂委員会編『豊里の歴史』, 豊里町, 1985, 249頁。
- 32) 金村別雷神社の講は現在、大別して4種類ある。①日月年参講：日参り、月参り、年参りを行う講である。日参講は現在では組織されていない。月参講は通常、3~9月の7か月にわたり、月に1回代参人が神社に参拝を行う講である。現在では簡略化され、初月(4月)と終月(9月)の2回の参拝で済ませる場合もある。年参講は年1回神社に代参する講である。参拝時期は講により異なるが、3月、4月と9月、10月に参拝する講が一般的である。②春秋団体講：主として4月か11月に、金村別雷神社へ講員の総参りを行う講である。参拝時期に応じて春団体講、秋団体講と呼ばれる。ただし現在では、総参りをする講はわずかであり、大半は世話人が代参する形式をとっている。③太々講：春秋の大祭に行われる太々神楽の奉納を行う講である。現在では春か秋のどちらか1回に参拝する講も増加している。講員による代参講の組織である。④祈年講：正月に新年の祈願を行う講である。現在では、元旦祭で御祈祷を行った講員分の札を、講の世話人宛てに郵送する形式が採用されている。

- 33) 居住地が判明している祈願者のみのデータである。
- 34) 金村別雷神社信仰圏の場合、第3次信仰圏を画定することはできなかった。第3次信仰圏は従来、分霊社の勧請や同行仲間型(総参型)の講の成立および、第2次信仰圏と比較して信仰者の分布密度の減少が指摘されているが、金村別雷神社の場合、分霊を勧請する方式はなく、また総参型の講(団体講)の分布がほぼ第2次信仰圏に一致するため、第3次信仰圏は成立しなかったものと判断できる。
- 35) 前掲19)。
- 36) 中東地区では産土社の祭礼には女性禁忌があり、女性独居世帯は加入できないためである。中東地区ではN姓を持つ世帯が32世帯ある(1995年)。1991(平成3)年までは氏子組織はこの32戸で組織されており、N姓の氏神的な祭祀形態がとられていた。1992年以降は姓と関係なく加入が認められるようになった。
- 37) 代参講の儀礼であり、講員が集まり共同飲食するとともに、代参者の決定や講金の徴収が行われる。
- 38) 吉川市近隣の三郷市や流山市の講の事例では、落雷の被害後に講が結成された例や雨乞いの祈願として組織された講の存在が指摘されている。詳しくは以下を参照のこと。三郷市史編纂委員会編『三郷市史第九巻 別編民俗編』、三郷市、1991、696頁。流山市立博物館編『流山市立博物館調査研究報告書8 流山の講』、流山市立博物館、1991、32頁。
- 39) 以前にはこの他にも富士講、木曾御岳講、第六天講などが組織されていたが、現在では途絶した。
- 40) 紙幅の都合により、個人崇敬者の分布(参拜季節・祈願内容)については割愛した。前掲16)では、個人崇敬者を含めて議論している。
- 41) 桜井徳太郎『講集団成立過程の研究』、吉川弘文館、1977、640頁。初版1962。
- 42) 前掲16)に対する有益な書評に、小田匡保「信仰圏研究の地理学的課題-松井圭介著『日本の宗教空間』を評して-」、駒澤地理40、2004、105~120頁、がある。

Reviews and Issues in the Studies of Religious Sphere: A Case of the Kanamura Shrine

MATSUI Keisuke (University of Tsukuba)

Key words: geography of religion, religious sphere, Kanamura Shrine, religious association

松井報告コメント

岩 鼻 通 明

本報告は、信仰圏の問題を中心に行われた。大きく3点の問題が指摘されるが、第一には信仰圏の時代変化、第二に同心円構造は理念的なモデル、第三に空間構造の意味するもの、すなわち地域分化はなぜ生じるのか？という課題が存在する。

第一の信仰圏の時代変化の問題は、十分な説明は困難がともなう。たとえば、拙著では、出羽三山の信仰圏を民俗資料と古文書史料（旅日記）を題材に用いて、相互補完的に検討したが、民俗資料は、時代的には近代資料であり、その一方で、旅日記は民俗資料が調査された時代に、ほぼ消滅してしまう。さらに、宗教現象の地理的分布においては、明治維新時と第二次大戦敗戦時というふたつの大変革期が存在するが、それぞれの前後における信仰圏の時代的变化を正確に把握することは、資料的にも、きわめて困難であるといわざるをえない。逆言すれば、もし、これらの時期的な信仰圏の変化を掌握しうる資料が存在したならば、その分析から貴重な結果を導き出すことが可能となろう。

次に、信仰圏の有する同心円構造は、あくまで理念的なモデルにすぎないのであって、圏域設定の指標を厳密化することに、さほどの意味はなからう。それよりも、このモデルが、地理学にとって有効な分析モデルであることが重要なのであり、歴史学や民俗学からのアプローチに対抗しうるモデルとなることを評価すべきではなからうか。報告者が実証したように、地方レベルの中小社寺においても、信仰圏の同心円構造が実在するのであって、このモデルが地理学的アプローチから一般化されたことは有意義である。

以上の二点よりもむしろ、空間構造の有する意味、すなわち、地域分化がなぜ生じるのかを解明することが重要であろう。前述の同心円構造は、ひとつの宗教のみを取り上げた一極構造的モデルであるが、実際には、多神教の日本においては、複数の宗教が競合しながら、重層的な圏構造をなしているとみなされる。そのような複合的・重層的な圏構造の解明は、いまだ不十分であり、宗教地理学における残された大きな課題であるといえよう。たとえば、報告者の調査事例である金村神社は、関東平野の内陸部に展開する雷神信仰においては、最大といえる群馬県の板倉雷神神社に次ぐ規模となっているが、それらの同質的な信仰が、地域において選択的に受容される動機が何であるのかを解明する必要があるであろう。信仰圏モデルは、信仰を布教する側の立場と、それを受容する側の双方の立場からの分析でもあり、従来のどちらか一方に偏った分析手法への批判的方法論でもあった。ただ、複合的・重層的な信仰圏の相互関係を解き明かすには、信仰を受容する側の調査が鍵となろう。村落内部に存在する複数の信仰的講集団を継続する動機がどこに由来するものであるのかを把握せねばならない。

高齢化と過疎化などによって、講集団の存続が危ぶまれる21世紀の今日、民俗学において指摘されているのと同様に、文化地理学ないし宗教地理学におけるフィールドの喪失に早急に対応することもまた大きな課題であろうか。

以上、簡単ながら、松井報告へのコメントとしたい。

(山形大学農学部)

【参考文献】

松井圭介『日本の宗教空間』、古今書院、2003。

岩鼻通明『出羽三山信仰の圏構造』、岩田書院、2003。

松井報告についての座長所見

小 田 匡 保

松井氏の報告は、「地理学における宗教研究の課題」というタイトルで発表される予定であり、事前に用意された発表要旨もそれに沿うものであった（著書『日本の宗教空間』、古今書院、2003、第2章からの引用であった）。しかし、実際の報告内容は主に信仰圏に関するもので、フロアにおいても戸惑いがあったかもしれない。

報告では、発表要旨にあるように宗教地理学の主要な研究テーマを4つ挙げた後、信仰圏の話題に移った。報告者は信仰圏研究を民俗学・史学の視点と地理学の視点とに分け、信仰圏の空間モデル（たとえば同心円構造）を指向するのが後者の特徴だとする。次に信仰圏研究の問題として、①圏域設定の指標、②圏域区分の方法、③空間構成の意味、の3点を挙げる。そして、地域に複数の信仰が重層していることに報告者の関心があることから、信仰の重層性のモデルを提示する。以後は金村別雷神社の事例に進み、信仰圏の区分を示した後、第1次信仰圏と第2次信仰圏の特性（第1次信仰圏では講が共同体の結合で鎮守神としての信仰であるのに対して、第2次信仰圏では講が独自の組織になり利益神的信仰になること）が述べられた。前半の信仰圏研究の整理を除けば、後半の金村別雷神社の事例は『日本の宗教空間』ですでに公表されたもので目新しい発表内容ではなかったが、松井氏の研究に疎い方には要点が分かりやすく説明されていたように思う。

これに対してフロアからは以下のような質疑があった。まず、他の神社では雷神が現在、電力関係者によっても信仰されている事実が指摘された。これは、信仰の変質という問題にとどまらず、信仰圏研究（とくに同心円構造の考え方）が農山漁村（とくに農村）を暗黙の前提としている点についてと考える。金村別雷神社の場合は質問のような事例は少ないようだが、都市にまで信仰圏が拡大し、都市住民の信仰形態が異なるならば、信仰圏の同心円構造に影響を及ぼす。現代の信仰圏ならば、企業の信仰活動をも顧慮する必要があることに注意を喚起していると言える。

また、さまざまな信仰が重層する日本と、宗教的アイデンティティが明確な地域とに共通な世界モデルが必要なのではないかという意見が出された。この問題を考えるにあたっては、信仰圏研究が日本で独自に発達している研究分野であることを知っておく必要がある。議論を日本国内という条件下にとどめるならば、たとえば報告者のように信仰の重層性に話を展開させる選択肢もあるわけだが（ただし、展望は明確ではないが）、空間的なモデル図を提示されてしまうと、それが世界レベルでどれだけ通用するのかという疑問が出てくるのも当然なことであろう。

さらに、信仰が重層しているように見えるが、個人レベルでは時期によって信仰を使い分けているのではないかという意見があっ

た。確かにそうだが、1年あるいは数年の時間の幅で考えれば、複数の社寺への信仰行動が重なるから信仰も重層することになるので、それは根本的な問題ではないと座長は考える。それよりもむしろ、松井氏のシンクレティズムへの関心とはずれるかもしれないが、「信仰の重層」を言う時に、多くの日本人がそうであるように、個人が複数の信仰対象を持っている場合以外に、異なる信仰を持つ者が地域に混住している場合もありうることを想定する必要があるのではなかろうか（たとえば、海外でのイスラム教徒とキリスト教徒の混住を思い浮かべていただくとうい）。松井氏の念頭にあるのは個人レベルでの信仰の重層であろうが、地域における信仰の重層と言い換えてもよい。信仰圏の議論とは離れるが、「信仰の重層」に関して脳裏に浮かんだ考えを書きとめておきたい。

信仰圏研究は、信仰分布の空間的広がりを確認するにとどまらず、その空間的差異に着目する非常に地理学的なテーマである。しかし、都市圏や商圏ほど資料が統計的に整備されておらず、定量的な分析結果を提示することは容易ではない。圏域区分を厳密に行なう努力も必要だが、信仰の空間的広がりやその地域差がどのようにして形成されたのか、その地域差はいつどのように変化したのかを歴史地理学的に研究することも必要であろうと考える。

なお、『日本の宗教空間』については詳細な書評論文（拙著「信仰圏研究の地理学的課題」、駒澤地理40, 2004, 105～120頁）をすでに書いているので、本所見では重複するコメントは避けた。あわせてご披見賜われれば幸いである。

（駒澤大学文学部）